

三省錄

後編

四

9
3780
9



原義輯

○神祖此仰は大廈千間夜臥八尺良田萬頃日食二升とて千疊
敷万疊敷の家とゆらても卧す處ハ一疊をり又前一ハ殊
をほらぬといひても食する所ハ口より叶ふその二三種は
まじに天下の主ももつる所ハ一飯より外ハな
然るは何ぞや民をうるやひふすなり身の榮耀を求め
金銀を貯へ身は替る家人は里ひ付けるやうはすふを
愚なる次第なり却のやうく先見えはるを唐の太宗ハ
其の股をりきて我腹より食するは譬へらせり民をも
我と一体のそれなるゆえは民をむらかりて財寶を取

附
上
一



集る時を民そむきとあせて君亡ぶるなり股の肉を食
腹を空ふといふと股の肉を食ぬを我身亡ぶるのつと
御遺訓

○尾張宗春公の家訓は云省略儉約の義ハ國家を治る根
本あれをいふと相勤づき事あり第一國に用事不怠して
を萬端差支る事れよく困窮の至極とある中無益の委
物を省き一ツ二ツよく濟いその七數多く持つて用ひらる
物とわがと改申付る類平生のより勤辨工夫有るべきこ
となり心得速てそ諸人の傷み嘆きよあると顯然なり
夫故は聖人の言も用を節して人を愛すといへ何事
ふまへといふとよくてそ叶ひぬと見えたりやう大食

大酒淫乱吾儘よくしるもの身と失ひ家を傷ふ第一
あれどそ是よりよきこととあきと覚え才の善生より
始め心行の暗いそ人間長久の至極あるを却て窮屈ある
ちと心得速るしく同じるなり尾張家訓

○紀伊治貞公の家訓は云人五の常を知らせを一日片時も
此地小住むと成るべしとされどそ仁過は弱く義過は
を堅く禮過は諂ふ似たり智過は虚言を吐信過はを
損をまゐる

氣ハ長く勤ハ堅く色薄く食ハ細くしるる廢るを
人馬を持武具を用意しる役を闕せしと思ひて美麗を好
むる費をなけむと儉約を守るべし儉約の仕方そ只我

身此不自由とするより外ハあり此世客来いと思つ
ぞ世話も苦しき心より叶ふ食物は向ふ時ハ何れも食ふ
一夏のあつさや冬此さむは七客此来れを多しき
なりぬ孫子兄弟も宜く挨拶しては暇やがし

父母よ嘆きて候は客より来て心残さず帰るふふはと

○水戸光國公の内家訓云苦を樂の種樂ハ苦の種と知べ
主人と親ハ無理ある者と思へ下人をしめめめめと思へ
子など親をせむへ子あきこれをもよくらぐく近き
本とすべし欲と色と酒とハ敵と知べ一説は恐きは火は
やどは無分別者ややどは堪忍を忘るゝことなす朝寐す
べし物争すべし深く興言すべしす被官家を

定めよ主人を被官は慈悲とせよ分別ハ堪忍は在と知べ
一九分より十分を必出する事と知べ古歌よ

事足れを足るよりせしむべし事足身工を安ん

子の業は其るごとくは家の落るハあふ人の世中

○毛利輝元家訓云やらの春雨や花のちらぬ程は面
白の儒學や武備のすしめ程は面白れ武道や文事を
忘れぬ程は面白面白の酒宴や本心を失ふ程は面白
あめあめやらの好色や才を亡けぬ程は面白面白の
利欲や理義の道塞らぬ程は面白面白の權勢や
他を誇めぬ程は面白面白の釋教や世理を忘れぬ不
と誇め

○上杉謙信家訓は心は物なき時ハ心廣く体ゆくのなりあつ
ろは我慢なき時ハ愛敬失は心は欲なき時ハ義理を行
ふ心は私なき時ハ疑ふなき時ハ驕なき時ハ人
を敬ふなき時ハあやまりなき時ハ人を畏れず心は邪見
なき時ハ人を育る心は貪る時ハ人は陥ふなき時ハ
ちろろは怒る時ハ言葉柔和なり心は堪忍ある時ハ
を調ふ心は曇る時ハ心静なり心は勇あるときハ
悔むことなり心賤しうらやむ時ハ顔ひ好まざるは
孝行あるときハ忠節厚しうらろは自慢なき時ハ人の
善を知心は迷ひなき時ハ人をとくめば
○大神君ハ或時御團扇を進りハ黄金の装ありとひと免

以上家訓
或人叢書

内院してち生を黄金うと有りハ御前ハ後藤庄三有てお
る不と黄金うとくはと中時つけ石をとよりつけ附て見る
いと仰有て則御前より石をつけ上への黄金のより申
上は時大は驚かひける内氣色あり早く此團扇を深く納
並ぶよりよて仰ありハ天下ハ此黄金不と至寶ハ
多くの領地を人よ迷はしめる黄金大切あるををりも
黄金多らば是を以て人を賞すべし領地より至て重き
ハ此黄金ぞりける重寶の黄金を以て如斯の物をか
ざる以外外のものありとこれ仰あり柳生但州物語なり

日下部景
衡聞集

○古代の器物金銀れ飾を見るは皆銅の上は金銀を焼付くる

ありあふゝハ無垢もあり是古代金銀少きありあふに儉
約は依て同じく是る所金銀と見ゆきを夫より事とする
て其質と金銀とするゝハ及び持て鎧冑太刀の金物な
ど無垢はまた重くあるを忌むなり後代ハ人れ心
奢り強くなりて金銀を無垢はとげれば人見て賤しむ無
垢を賞玩するを却て賤しき心あり 舳艫訓
○唐の治を聞て堯舜禹湯文武成康王ふとて天道を恐る衣裳
をこうらに家居をそくへりて天下は萬人を安穩に治
ありゆえは四百年六百年或ハ八百年天下乱れず子孫
榮えり其後周の末は世に至り君する人奢を極めたり
も智慧深き國ありとて天道の理をとて失ひ仁義の道

を去らず衣食は金銀を盡し家居は玉をみり萬人のく
るゝを不知りて一人樂をなせりものそ一代二代は
く亡ひあり秦漢の代より又學文の教も正道を失ひ惡教
教へり表を君は随ひ内はを常狼野干れ心さへをなく
む是聖人れ世は出て道を以て天下を治めばるゆえある
へし如此惡世は時分は天下を治るゝハ文武の二ツをう
むんを治る事成るゝ 本佐録

○天地は間ハ人程寶ハなりす金銀を水火はいつてもあふ
せず人ハ付ての宝ありあふても道は背きある金銀を
貯へ好時ハ人を損するは依て君子ハ財をとらばざる
は近代ハ君れ一命は替る大事は及で二心あるありと

みも侍を敵のおどくつひなり百姓を妻子を離し
飢は望むべくもくはけ金銀ハ土くれ此れどく茶入反
古の切るぐと寶とす國の政れるはけりあるも此之
道此理あら茶湯の師匠をすふもの子孫ををらず亡
ぶべし天下此主人の數寄ハ日本の國土山川をよく作事
て數寄屋と定め其中れ万人を客と請し其人の心は合ふ
やうよく主とを致し多りバ天下第一の數寄者なる屋
しあり堯の家居を云ふ地形高さ二尺木を削らす堂を以
て屋根をつき金銀をかばらぬ布衣もやぶさざる肉をの
へどく只天下れ萬人を撫育する心此外別は念なり天
地此間ハ生るる金銀米錢ハ天地の寶ありとを我が私

の奢は進ひ捨るそ天地の間れ物を盗くするなる屋一天
其咎をゆるぐらんやと云日本之事を尋ね聞は
神武天皇ハ 天照太神の掟を請て衣食を乞ふに家居
をそくふりて萬民安穩は治り清く故代に子孫は相傳
へく天下太平あり末の代とあり賴朝天下を奪ひ取て
口は仁義を以て民を治るゝとて内心を欲深く天下を
我有りて万民を苦むるは依て其身死期全うらむ賴
家ハ弟は殺は生實朝ハ甥は殺さして禮なく天下を失ひ
なり 同書

○治世も身と樂は持はれと保長も悪者何れも業のふ
き時を婦色の悪事出来いす 朝起るより臥するの行儀

定め日し其過に及ばず食事も常は美味汁に添は
るるものありけり平日は食物随分軽味此等の宜
い月より西に度美味添はて能く承り及ばぬ 神祖御文

○大小名ハ申は及ばず平日の暮令停止分限相應を勿論直来
並倍臣は至り高知の面より知行内一分を軍役一
分ハ領分救米の々々一分を以て常々儉約を忘るは
所帯経るべきなり直来より七石以下以下の士着用
絹衣不可用公私の常用木綿布より可相濟事 御遺誠

義云萬世一貫此龜鑑なり誠は以て仰奉るも恐るべき
然るは當今下々の様満天下の人潜上此罪遁るる知る
恐るるを以てするす

○翁若かりし時京師は一人の老儒ありて古きことを覚え
て語るを

東照宮様在世の時近習の若き者は汝自身を保つは肝
要は語ありて五字なり云ふありて七字なり云ふあり何れも
承て度と仰らるるは何れも承て度と仰らるる五字は
いへば上と見え七字は下と見え汝等の常
は怠るを知らずと上意ありあり當世の人大方ハ上り
目と付身の程を知らば夫ゆゑは此のつらき事を
物とては華嚴とていふるなり家を持崩し不承
れあつて出来て揚辱し及ぶなり 翁語

○徒然草云無益れはくもなりし時をうつすを愚なる人と
附上七

も僻事^{ひがこと}する人々といふべし國れるる君れ為るやむさうと
と得^えざりてたずむさうおのり其あすりのいとまうさう
そらすおのり人れ身よやむさうとえづいといとを
むとらるる才一は食物第二はまゐるもれ才三は居所あり人
間の大事此三よを過^すは飢^うは寒^{さむ}は風雨^{ふうう}ありおのり
をて閑^いはすくいと樂^{たのしみ}とす但一人皆病あり病はあつは
ぬれを其愁^{しみ}思^{おも}う一醫^い療^{りょう}とすまゐるづらに藥^{くすり}とくく
四^よれあつて水^{みづ}えづるをまづ一とすはれ四つあつるを富^{とみ}
とす此四の外もといふをむをぬてとす四の
儉^{けん}約^{やく}をらば誰^{たれ}人の多^{おほ}らざとせん林道春評^{りんどうしゅんひやう}て云此段衣
食住僅^{いしょくぢゆん}は足^{たり}て多^{おほ}の^ほとすと云て外^{ほか}を以^{もつ}ひ世^よをむらど

らざるをたらんあらさうなるなり云々

○漁^り有^り雅^や卿^{けい}の曰^い國家^{こくが}は費^{つひ}たるものと七ツあり帝王^{ていおう}の王^{わう}法^{はう}は暗^{くら}く
して別業^{べつぎやう}は堅^{かた}くおりのまゝと武將^{ぶしやう}は萬民^{まんみん}の苦^{くる}む事^{こと}を救^{すく}
はるゝと色^{いろ}と珍^{めづ}るは迷^{まよ}ふと出家^{しゅつが}の佛^{ぶつ}法^{はう}はうと世智^{ぜち}は
賢^{けん}て突^{とつ}をぬてると賣^う人の家業^{けがごう}は暗^{くら}く諸^{しよ}の勝^{しょう}負^ふを
好^{この}むと武士^{ぶし}の武藝^{ぶぎ}はうとて詩歌^{しか}音^{おん}樂^{がく}は道^{みち}は賢^{けん}き
と富者^{ふしや}の貧窮^{ひんきやう}を救^{すく}はるると貧者^{ひんしや}れ為^なるゝと月
日を送^{おく}るをちり人を外^{そと}の道^{みち}を知^しるも己^{おのれ}の道^{みち}は達^{たつ}ぬ
るをよとをたづぬ人を救^{すく}はるゝと色^{いろ}欲^{よく}は溺^{おぼ}るゝと下^げと
する者^{もの}なり 和論語

○秀吉公はそのまゝと差^さ滞^{たい}るゝと甚^{はな}嫌^{きら}ひのゝ高麗^{こうらい}政^{せい}の

時分奉書しも續紙を用いずるを損に支を墨と消
一是をほのつとあるとふん 續武家閑談

○建久四年癸丑十月十一日鎌倉中の法度と宣らる文は

一炭一駄 代百文 一新駄三十束 但三把 代百文

一やき二駄束 代五文 一より一駄八束 代五文

一糠一駄 代五文

件の雜物近年高直く法は過るり賣人下知と爲る
ものなりと云ふ

是を天正十九年より二百六十年以前此事を今に賣買
は多くらふと云ふ錢のあふを少しのり昔金一兩の代
は米錢はけと古き文とも見えて天正年中は頃金一兩の代は

米を四石永樂一貫但一むと四貫はあはるを二十余
年以前はよりなり其ころ金一兩はるを金五兩はるより七
兩はあり然るに今ハ國治り民穩の内時代皆人金多し人
は取あつと云ふといふもあはるハ古今同事と云ふなり
その夫のひれ正体をおても碎てそ火は入水はむそ生
萬劫をふふと云ふ色性もあらは故は佛と云ふなりふと
れ正体と云ふて 老談一言志

○或翁の言は奢より儉は入事を難く儉より奢は赴く事ハ易
し古ハ金銀の位貴く諸物の位賤し故は今を以ていふへ
を見ても諸物もふと異なるやうなりおもつるなり上古
此事ハ並ぬむり京都相國寺朱に膳碗を伝はせし記

録より人前より付五銭目づりて成るといふ近世萬物一度價の
倍なる事あるを再び旧のありしに復するごとく其
後ハ其上より價を益し其價を増事なきことなり
凡百年以来諸物の價三倍五倍或ハ十倍なる事あり近
年京大坂諸國に及て女子奉公人もくあり京都など二
十年以来を年々小給銀高直なるを此より見ては人
甚だ我々の世に事とつひ一向格外の事をせざる人す
るなきゆゑに主人も随分なりと云抱ふなり奉公
人其身を不相應の奢美前より有制度をさゆえなふべ
し以上贅昌ふりて奢は長田舎より小なるは出る人す
くなく如此に公人をきやうハ人を召仕ふ人多く成

てき公人行はるらずやあらばい人皇より以来當所代
りて贅昌を有するといふ近世を以上困窮時節柄
をいひつゝ言葉ハ通用に常語なり然るに諸國浦に果し
て神社佛閣の結構ある事むろふかゝりて目と驚す
むろりありて此造作に用いた金銀を何人の手より出る事
やと語る聖學自在

○續日本紀第四元明天皇和銅四年此文を記するに錢一文は
米穀六升とあり省佰は五石七斗六升ありて錢の貴き事
のきなりとありとて以て百姓奢る事あり食ふに乏しき事
なり南嶺子

云省佰とを充百とあらざる九十六文あり

○骨董集云江戸銭湯風呂は始寛永十八年印本より物語云

天正十九卯年此夏の頃より伊勢与市といひ一その銭瓶
橋はもとよりせんるる風呂と一ツ立る風呂銭を永樂一銭
の中略今八町毎は風呂ありて十五銭二十銭つゝて入之云
云云此時は永樂一銭を銀四銭の代りよきふふ金
く四文は湯銭ありて風呂銭も近きはよく高下あり
しうとん改革後當時は大人をハ父子供ハ父小兒連
ハを十二文り定むる実より世れそのより下直の代を
湯銭計りと里つる因云永樂銭ハもと應永十年八月
三日唐船一艘相摸國三崎へ漂着せり此船は永樂銭數
百萬貫積乗るりしと鎌倉に公方家所徳よりて天文十

九年はあら東國の諸民銀は取難て同直段り用い
ふ市町より悪銭を撰び淨論多きゆゑ天正の始め北
條氏康の下知より永樂の用い他の銀銭と不用やう
はなりて悪銭を除きてハ次才より上方へのく上やく名付
て京銭と稱へり此は當家天下に統所下知は後ハ世り
至て慶長九年の正月永樂銭をの用ひ銀一向より并
はあらむと於此に永樂一銭銀四銭の代り遣ふは是
とも猶舊惡を撰び淨論あるは此事同一なり同く十
年十二月八日大久保を多木より依て永樂鈔制禁銀は一鈔
のく可用者江戸日本橋は高札を建てるを永樂廢るぬ
○或時土井大炊頭の居間は一尺むのりなる唐絲は切しるあり

しを拾ひ次は誰のあると呼ばれハ大野仁と云ふと中近習
れよのわあをいハ是をそれ方ハ預けせくと申はる彼者
かハおすりいその糸をいけとりたのり立を次の百は居
り若きものどもあ糸屑何の用と云ふきそ大名
相合むと云ふいそ一笑ふものもあると云ふその後二
三年もして大炊頭これ仁を市をいび是年それ方ハ預け
せきし糸切つと尋らせけは是はいとて巾着より取出
しハバしられいそ服若れ下緒のとけをるを結ひて家
老を呼りいせを召よ三年前仁を市ハ唐糸の切を拾ひ
預けせし外の者ども我を各きそのといひあれ糸切
何の用と云ふと云ふて笑ひしれをまたる中よ主の言

付するを大切に相守る者と奇特なり仁を市ハ二百
石をとらせべと申渡はるはくすの糸屑の大切あると
けを語に聞すべし此糸を元来唐土の土民のいそ糸を
取て糸を飼ひ糸をい糸と云ハ唐土の商人のいそ糸なり
もこの海上を經る吾邦へ渡り来り長崎表の町人れ
よりいそ糸をいハ京大阪のそれども買ひ取ればい江
戸表より下りいその糸をいハそれ分いのをいりいそ糸も
ぞいやうの辛勞して出来しそのをいハそれ分いのをいりいそ糸も
芥となりて捨るといハ天道の咎をいハそれ分いのをいりいそ糸も
緒の先くといハそれを費るといハそれ分いのをいりいそ糸も
と今二百石にて買取ていそと云ふと云ふとあり

中私欲あるものを罪し諸役人と吟味しけり諸用と節儉
しけり自分木綿服と着用し豆腐半挺と用ひし菜と萬
事是順して日夜心を盡しけり五年ありて困り漸
善ひ家中の祿をも滞りて後し民の窮するをも救はせし
ば諸人感心し士民の親とあつて多しといふ 同書

○萬歳ハ造宅の祝辞鳥追ハ田事の祝ひ春駒ハ春來の壽なり
衣食住の三ツと重しけり故に年始は是とせしけり
と確し侍るよしを食を得て命をとりけり衣を以て寒を防
ぎありて雨露はあつて人生を安んずるよし
王政の治りてぞ孝悌忠信を教へし中臣頼朝衣
食と穢しと天津罪とせしけりあり深き意ありとせしけり 鹽尻

○東照神祖御前より林道春小日本書記を講せしめしけり
漢の景帝の詔書は黄金珠玉を飢て食すべからず寒て衣と
すべからずといふに農ハ天下に本なりを務て農桑を勸
め衣食の物を得るなりとせしけり
神祖此に至りて暫講と停め本多守と召し米穀を蓄へ
諸國へ其由命とせしけり仰ありと承りぬ 或人叢書

○神祖の上意は朝夕これとせしけり馬物をきりて
やうり人よりありて家來と持侍の覚悟ありけり
と仰は高師直の奢のあつては諸人は緩急ありては尊氏
は恨なき人なり心離れしけり石田治部は驕慢し依て太閤
恨なき人なり 改正武野燭談

格式抄よりて人よはれらんとおもひ心より一色の武器も丁
寧にこしらゆるゆゑをそとよりいれざる道具をあらはる春
属多くあり戦國は八里の外の外れ得分ちあるとて切つた
る江府の外は不務なきふり取つたあたる上を上げ歎かす
して外はすゞやう有より去るのうらなりの拝借下は
重しあるとありけりを願ふとくよなるべきとおも
ふを放たれり人おもふに諸式の高直なるもや「泰平
れ定ちり此上も諸務本救ふとやうあるべく八相談言上
あるべしとやはせざる此時物内番入といふあつて殊
に新内番その内代より出来るとのや 同書
○嚴有院様いよご竹千代君の時りの年その遠島の者の事

と人々物づつするを聞けり依付らざるを科とゆる
して島へはらふをならせられ食物なくハ飢死すべし
不便なる事と有るよしと

大猷院様きこせぬひちと威どけりや所自分の
仕承るよりよき向後遠島の輩扶持せりるべしとく
島支配代官へ下知せられしとや所成長の後寛文延寶
の間遠島の者ともは農具種物を賜て死刑は極まる者
とぬく護るべしとけりる 同書

○お平侍前も正信萬治年中御奏者番となり貞享年中は至る
より二十餘年の間所は係はるがごとく勤うらまはり別業は
内は野菜を植て賓客あはバ調味を付常は名菜をふる

しみて身は花を求むる事なりとぞ 同書

○昔ハ侍中野がけ遊山は出る事無の事あらざ歩けの遊者
山望のかけりて誓古れ者なり尤多南の食物をもち出
て町より喜食物を買て其當の食とするなり其内
餅饅頭あづきもち焼もちる多し是ハ麩は調て
食ふ事あり寛文四辰年よけんどん蕎麦切といふもの出来
て下賤のものを買て食い小身より多は蕎麦の面調
て食ふ事なり近年よりとなく調へてくふよりなる
なり 古老物語

○昔ハ懷中多葉粉といふ事曾てなり善也あらくも亭主の多
葉粉盆ある多葉粉を吞む事ありの事ありといふハ速ハ

て亭主座へ出るなりハ吞む亭主物語といふ多葉粉系
と進む客をよづ亭主より来ると意氣のたゞと二
三度辞退其時亭主より紙を展ぎて烟管をとりは
をとりづ吸口を紙にてぬぐひおせりて来ると烟管
をさし出さ客取ていづて吞む多葉粉をいめて一ふ
くも二ふくも吞つむとけり前より置歸る時分
を紙にてぬぐひ多葉粉盆へ入眼を立此ぬぐふ時亭主
其よりさし出さしと挨拶すなり亭主の顔役の
老人は親方ふたば多葉粉を吞まよくありとも慎みて
吞む其頃ぬぐふとき奴く云る人も六方男を盡す人
も右体の座へてを吞人なり其頃ハ多葉粉入とて青

濡して紙をいゝあまの吹繪墨流しなど前梅の陰を
急相するその有り近奉ハ多葉粉の香より不作法にて烟
子入ハ金入の紙あるひいんを志由ちんをいゝく結構を
盡し自慢氣は持あゝ事よをなるまゝ 古老物語

○むうそ西瓜をききくの面く食事なり道辻をいゝて切妻
はするを下く中間小者もどかひく食ふ町人も下くもの
里食女中もどきいゝくも食事なり然るゝ寛文のあら
より小身ものあまをとのく食ひより後にとそてを
や終るを展くも用いりよりよりなりなり 同書

○六七十年以前より女中地るといふ小袖とそなるハな
し人をもきふ女中小袖の上着敷ハそつぱとも地なりそ

まて此地なりといふ小袖ハ地を金筋りて一面は松皮
菱のよふ筋を並する小袖なりきんめう女の衣裳五ツ
六ツを拵する程の女中とそ小身りても家老の妻もどを
地ありと拵す此小袖ハ祝儀婚姻に月前句など男の
きめと着る時女ハ地ありと着る女のかきめ小袖な
り其頃ハ世のきんめうもあつきを着るなり 同書

○昔ハ本庄は屋敷あり萬治のあら田畑と武士屋敷は併付ら
せしは貞享のあら武家屋敷みなるありなりそその出
とくは田畑となりそ其後元禄のあらそこれ武士
屋敷となり町も出来く此時より本所と文字をも書あ
らゝめらるなり 同書

○或時

大猷院様へ松平伊豆守唯々米内當地拂底仕はる所
 藏米半分出し申拂し可申付哉の由相伺は得る左様可申
 付旨仕仕出は其夜お師寝所誰う糸は振りと被る召は
 付大系主膳内次之間は休否在申請仕仕出は又今晝は
 藏の米半分拂裁う相伺は付て其通より付仕大難
 仕仕出は能は思案仕遊は均々大事の内務の米は若急
 は内用の為にも申拂し事無用之致す有く所請米出
 し拂し申る今夜更に何更方へ紙を以可申建旨
 仕仕出は由 寛永小説
 系云恐すべし人令援助は内苦心遊は出はて内寝の旨も
 内休念遊は出ざる難有都下をらむや

○豊臣太閤伏見の城より

なる時廣間は出らる五腰の刀
 と見て試は主の名をいふべしとてはききしはすまじも
 らはききしを前田玄以のりて知食なるや誠り
 神智よりしらせめふ出とより驚きさるるを太閤笑
 て何の子細もなき事なりと金作より美意あるハ秀家
 の刀あり異様の物敷寄せを輝元なるべし大小長短の
 格好より莊嚴の相應を武藏無相は極なりといふ
 ましとのや常山紀終は見えしや実其人くは氣象を
 地へするはるるを金作より美意を好するなり
 秀家を終は家國をゆるぎ絶つらむなり 頼義朝臣馬
 物具はさハやのなるを亡國の兆なりと士卒を戒めたり

ちとと地をへて伊勢宗五のすゝる大冊子と公方様都
將軍家の所腰物を鞘めを地へ柄皮をへし金ありて
柄より同前を思ひぬはす柄口金もき同
前同費九枚内より二枚相違きつけ所并金銅もやきつけ
とあるふと考合すれを金要垢の小道具を用ひしき
なり 柳庵雜筆

○太平記は青砥左衛門出仕の時木鞘の刀を若木太刀を
持てゐる叙爵の後をあれ太刀は弦袋を付るゝと見ゆを
里木鞘より木太刀といふを儉約して太刀刀の鞘をう
へて塗ぬ本地より差するといふ 伊勢貞大の記

○寛永三年五月所上洛の時路次中宿賃所定書とて令條記

は見ゆ

一人は四文

一馬は八文

但自分薪焼は一人は二文馬は四文馬屋七文自分薪
焼は二文馬屋八文とも亭主は薪は四文馬屋は
一京よて馬屋七文とも亭主は薪は四文馬屋は
以上

寛五月

今考ふるは寛永鈔四文八金一兩千分一なり 金一兩は四貫文なり 今の鈔は
文五分は當ると云へれども慶長金と今の金の目方も
同トのらう通用の價七兩なり 此とを引替て賜りて割は
て知るは大低一倍なり 當は此四文と云をその六文五分は
附上二十

直一是と倍して十二文と知づ

○寛永の頃三谷通の名人白馬白駒の刀単の袴白くわれ
袖肩でちとすく白きをわつ風流のちとす寛文二年
の板小歌物よりとりて本は馬より糸より三谷通の
一駄賃附あり

祈より吉原まで駄賃附之事

一日本より大門まで 並ふらん二百もん

馬奴二人ちむろづーふ 餞白馬ちん二百四十八文
一飯田町より大門まで 並ふらん二百もん

馬奴二人ちむろづーふ 餞白馬ちん二百四十八文
一浅草見附より大門まで 並ふらん二百三十二もん

馬奴二人ちむろづーふ 餞白馬ちん二百四十八文

是白馬を好み証あり 奇跡考

系云此よりその書ハ元板を萬治二年庚子に發行
なり寛文二年ハ再板なりとぞ其あるのさむろづー
里ふは二人馬子を世の舟は二人船頭駕籠の二枚は
て走るをいふるをひたらんより白馬を好むも唐詩
小少年行の遺却珊瑚鞭白馬驕不行章臺折楊柳春日路
傍情とある趣は似たり當今遊冶郎の形態とを細隔
て昔一忍ぶのや記を

○大膳太夫大江元就を毎年正月元日の早天より水うづひ
わひて東方よりむらひ志むらく黙座よりあるとく近習

とそはとありとそこのくひなる 新武者物語

○信長義濃ととりて勇強智謀の名ある、それを扶持せらるる義
濃は、後衆といふそれ中、稲葉氏江安藤をまぐせりつと
稲葉ハ、それ最て称より信長紀伊の雑賀孫一郎国若
左衛門兄弟と説て降らしめんとせし使をやるは使へりて
のちろさきしやとせらるしやれ間いよご分明なり信
長のきひく稲葉伊豫も今を稲葉すふらうれ地りゆ
て後孫一郎若左衛門ハ信長は降し尾張は来て幕下は属
するれ礼をなすとのとき信長孫一郎は同て曰はれ免れ
使いん孫一郎が曰その人騎歩ありくひきつせこのく案
内と通じ馬は素なふらふは城門をめぐり信長

の使と称して言ふなり色あきり居を擒殺せんとする
そのなりとむひ本丸と二の丸の間に入るときは門を閉前
後よりとせらるしやとて討て信長の曰えり
何ゆゑは稲葉をなすや孫一郎が曰稲葉をそれ称
え免の使と大よとせりや五里より案内を懸
勤といひ信長の使といひて来る臣櫓のちてせきを見
るは馬鞍のちりを出立質素うて歩士多し人なりは
是て城門の外より馬よりありる人を残し若黨二人草
履取一人を具し威儀を多しうて徐にあゆみ来るは
大よちきと威し自身門をひらきいでむひ内はすのき
入るれ辨義理あきらうてさうも恭敬なり股引の

はきより刀を布の下帯と一ありあき則身を儉く
財と武事とちゆるさるるべし良士の風ある
は化せられて帰服せし信長とせをきて且らひ且歎
あるすし 武將感状記

○岡越後家初を内と号し蒲生氏郷ははるの百五十石あるまゝ
常は子腹をばくす素人のゆゑは諸傍軍もそれ早劣なる
をふくむり小田原陣のとき金七枚しりて馬を買ふ家中馬
ぞろひのとき才一番なり氏郷うれざるなり感して三
百石よなり所くよある武功あり終は一策石を領し後
景勝は仕(摺上川の合戦)は正宗と太刀うち仕る武功はよ
きて錦の羽織をるるそのうち越前にはふ士談會稿

○あるとき如永公長政公仕目は表へりてのみ家老衆中老衆
諸物頭其外諸士は目見せりてのち一庭して大身小
身ともは諸事無限相應の身持覚悟油断はべからず家作
衣服諸道具等よけるまで身代なりといふくあらくその
勝は相續な公懐念なくはとむる分別肝要なり平生の食
物猶つてなるるくあらく綴初しも美食をあるむでり
む内渡逼迫はかりびぬせを切れづり不替公はなり行義
理あるひそ自然のちあるときは出立べきも立し
なく恥を得るむれなり切あふらぐてこのまらける義
せ人並は出るくくもをくく刀をくき有はちあり
その覚悟の善悪はうひこれきやうよするべし武具を武士

いづれも大事の出来事なりきてもあらざその時の多あり
のうへもほりきかれを武士あり夥も無益の八用をさふ
きて人とあはれくうえをんを予がふれにたりとあは
されれそがけあはつゝあひて備因二國ハさきてあ
士あはれきふと予がふるさつあり 思出草

○成瀬吉右衛門へ子息隼人銀子二十枚持来して此老中此事
をききあはれ口よりあひいしものやめききよとていふ吉右衛
門その銀子とくろふへてはあはて美食をそのあは
きときあはれむきばよくいふの銀ハ何ぞ入づよとあるづ
きものやとあはれははて大坂冬の陣のとき隼人ふと
伊豆さふむうひて吉右衛門中はさるへ来年八宮て此陣

ふるふしあふし中供さるづ 折角良馬をさるめく案と

て金二十枚つはつゝいより 武功雜記

○松平伊豆守を諸大名より献上の此残りの外間より其國に
名物すこを江戸ふてし初そのあはれ音物あはれさゆえ
毎度寶父大河内金をあはれつゝ相あくられさるを即刻町人
へ賣りてその代年より金高よりなりきき大駱
小身士の着料なり貸具足三十領とあはれさるて伊豆さ
へ相あくられは豆州あはれ入中はさる早速礼よりあはれ
さるよりさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる
入を小身よりさるさるさるさるさるさるさるさるさる
入よりさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる

居宅も雨も多て暑もくはる貴子ハみる焚そのうし詮
さなくやうく竹の椽さくのて生木をけらうて塀
へさうけやうその内は住し門をさうて人達を
終は餓死はあひる近隣れものもひさしくえ乃
ち出る哉不審してあきを役人達へさきを役人やう
その家よりあきをえさるよさうてはさうあり
たうしあきのうさうさうさうさうさうさうさう
は捨一筋きうくぬぐひるさう竹釘をうらうれ捨をけ
あひさうあきをえさるしんさうさうさうさうさう
一方とんさうさうさうさうさうさうさうさうさう
とあきさうさう黒単の鎧一領は定紋の前立の甲さうの

馬具の鞍残さうさうさうさうさうさうさうさう
さうさう軍用金五十両何ぐとさうさうさうさう
つてあり垂本は何やらん濃紙はみれありさうさう
てひらきえんは陣羽織外は麻上下一具小袖熨斗目袴帷
子のさうさうさうさうの片とあき束一式あり腰れものを単柄
よて簾相をさうさう身ハ水のさうさう研さうさうさう
銘のさうさうさうさう銀る枚の折紙の箱あり役人さう
あきをえさうその始末を主人は逐一言上はあひさう
主人もさうさう不便さうさう則檀那寺はさうさう
倅さうさうさうて父は名を相續や付さうさうさう
借金主人よりあきを返糸さうさうさうさう倅父

是非命^{いざな}は死^しに多^{おほ}しとて士道^{しどう}はあひて天晴^{あはれ}の仕方^{しほう}あれを
傍輩^{たうばい}も不便^{ふびん}なりて書^{やうり}育^{そく}一^せ世^い話^わ一^せ々^さ成^{なり}長^{なが}れ後^{あと}で多^{おほ}
く勤^{きん}仕^しなりそのち森家^{もりけ}作^{さく}州^{しゅう}津^つ山^{さん}退^{たい}持^ぢれとて浪^{なみ}人^{ひと}と
るとなり 夜譚^{やだん}随筆^{ずいひつ}

三省録後編附言上終



